

学長インタビュー

地域に密着した大学、 世界に冠たる大学を目指して

—21世紀を生きる大学として—

今回は、原田学長の年度当初のお考えをお聞きした。聞き手は森広報委員と越智広報委員。

広報委員 四月から全学部の新入生が西条キャンパスに集いますが、今の気持ちはいかがですか？

学長 二十三年かかった移転がようやく完了することになって嬉しい。任期の間に移転完了することは、私の公約だった。文部省はもちろんだが、事務局をはじめとする多くの方々に感謝したい。今日西条キャンパスをいろいろ回ってみたが、整備が進んでいるのに私自身驚いている。

パーク・ユニバーシティの姿もだんだんはっきり見えてきた。山中池の周辺を見て欲しい。学長裁量経費をもって、山中池周辺の環境を良くするためにはドウダンツツジを植えた。これからは桜を本程度植えるつもりだ。今年度は桜を本程度植えるつもりだ。

過日、中電主催のコンサートで歌ったが、クロガネモチを三、四本寄付してもらったことになった。その他、学内整備としては、留学生会館用に福山通運からも多額の寄付をいただくことになっている。

これで教育の基盤ができたわけだから、これからは、なかならず学部教育



に力を入れようと思っている。平成九年度から、新しい教育制度のもとで育った学生が入学してくるが、そのために早く学部教育の見直しを図りたい。とにかく、自分で問題を提起し、自分で問題を解決するような学生を作る教育を考えなければならぬ。このたび、教育と研究に関する広大白書2もできあがったので、その提言を参考にして、地域に密着した広大、さらに世界に冠たる広大の具体像を考えたい。

あと数年で二十一世紀を迎えます。フォーラム七号で二十一世紀を「心の時代」と呼んでいらっしゃいますが、広大の「心の時代」をどのようにお考えですか？

学部教育に力を入れようと思っている。人間性も重要なことだ。人間には心のやすらぎも必要だし、それを大学は無視してはならない。そのためにはコミュニケーションが重要であり、HINETもその一環として利用することができる。できれば、カリキュラムにも反映できないか、と考えている。完成期にある研究者が一般教育に携わるとか、方策はいろいろ考えられる。「心」に対する配慮がなければ、総合的な視野をもって問題提起し、問題解決する学生は育たない。これは学生の就職にも大いに関係している。レジャー化した大学といった大学像は、

新しい広大には不要だ。

いま、広大には多くのアジアの留学生が集っているが、逆に、広大からアジアへ出かけて協力するといったことも必要になるだろう。国際協力研究科は、そのための突破口になればいいと思っている。とにかく、日本という狭い枠にとらわれた大学では、二十一世紀を生きる大学にはなりえない。

昨年度の広報活動について、感想や注文があればお聞かせください。

広報は重要な仕事だ。大学の情報基盤であり、また、開かれた大学であるためには欠いてはならない仕事だと思える。できれば、広報室を作っていつもの広報活動に力を入れたいと事務局に希望を出しているほどだ。広報委員会の規程が変わったことも喜んでいる。任期が二年になったが、これでいっそう充実した広報活動が可能になる。

フォーラムは面白くなったが、もっとフォーラムを育てたい。してほしいこともたくさんある。大学の研究ももっとPRしてほしい。頑張つて受賞した教官はどんどん紹介して、広大が何をやっているのか大学の内外に知らせてほしい。できれば、もっと横のつながりも広げてほしい。国立大学は同窓意識が希薄だと指摘されるが、これも、フォーラムを介してなんとかしたいと思っている。これは、学生の就職にとっても大事だと思う。私も、今後ずっと、フォーラムの学長インタビューを続けさせてもらいたい。